

和牛試験場へ赴任して

林 正 夫

— (転任挨拶) —

先般の異動で、図らずも和牛試験場長を命ぜられました。畜産課にお世話になっておりました間、すべてにおいて不行届きで、決して及第点はつけられなかったにもかかわらず、始終暖かい御指導をいただきましたことを感謝しております。これからは、今までと異った立場から、和牛専門に取り組むことになりましたが、皆様の変らない御叱正御指導をいただきまして、与えられた職務を何とかして、果したいと考えておりますので、何分よろしくお願ひいたします。

幸い、ここ数年来、和牛は高原景気とでも言いますように、増大する食肉需要に追われて、高値を続け、将来とも明るい見透しに立っておりますので、和牛試験場という窓口をとおして、できる限りのサービスをさせていただくことができると思い、生きがいを感じております。

岡山県の和牛は、今は10万頭を下廻っておりますけれども、その資質がよいことと、飼い易い経済的な点が買われて、ここ2、3年の間に、その販路がずいぶん拡ろがって来ました。誠によろこばしい限りです。この機に乗じて、一そう加速度的に発展を期さなければなりません。

ところで、昨今の和牛の趨勢として、食肉の増産と、農業経営の改善向上とのため、肥育事業が、著しい勢で伸びておりますが、誠に時宜を得たことで、結構だとよろこんでおります。しかし、ここで少しばかり別の角度から、岡山県の和牛を見ますれば、全国的な地位は、あくまでも優良種牛を供給するという、言わば原種圃的役割をもっているわけですから、昨今のように、肥育の素牛とか子牛が異常なまでの高値で、肥育事業に脅威を与えるほどの情勢の下では、なおのこと、優良牛の生産に拍車をかけなければならないと信じております。ここで、ことさら優良牛と申しましたの

は、普通程度の牛の生産ならば、東日本などの新興産地が台頭することでしょうから、これらが追っても追っても、追いつけない地位を確保しなければならぬと考えているからです。また、こうすることにより、従来から、畜産の中では低位生産性の代名詞のように考えられ勝ちであった、和牛の生産という畜産経営の形で、3万円の生産費がかかると致しましても7万円の優良牛を生産すれば、3万5千円の普通牛を2頭生産したと同じ経済効果が生まれるわけですので、明るい和牛生産ができることになるわけだと思っております。

もちろん肥育のだいじなことはゼイ言を要しません。

着任間もないこととて、ハッキリした考えも申し上げられませんが、現場に頭をつっこんで先ず草づくりの重要なことが身をもって痛感させられています。何れ別の機会に述べさせていただきたいと思ひます。

最後に、個々の農家からよろこんで利用していただける試験場をと考えておりますが、何しろ僻遠の地にありますので、地理的条件の不利は、充分心得ておりますけれども、皆様からたえず足しげく御来場いただきますよう、願ひいたしまして、筆をおきます。

(35. 5. 末日)